特集 800号記念特集

順天堂医学, 2005, 51
P. 465~467

原著論文の移り変わり

藤井 博 昭*

HIROAKI FUJII

『順天堂医学』の掲載物の中でも原著論文は、若い大学院生や医師・研究者・医療従事者などが初めて研究を行った研究論文が主体である。よってその時代の新しい研究方法、新しい概念や分野、その時代の講座研究テーマ、診断治療体系および社会ニーズの変遷などを反映しているといつてよいであろう。1981年3月発行である701号から800号までの25年間に於ける各巻（4号で1巻）での原著論文掲載数をみても、全論文数が426、各巻での最低は50巻（2004年）の9論文から最高39巻（1993-1994年）の23論文、平均17編となっている（表-1参照）。特に増減には一定の傾向は認められず、この25年間に於ける原著論文の重要性は変わっていないと考えられる。ただ、各分野での発表論文総数と大学院生の人数はこの25年間で増加していることから推測するに全論文数に占める『順天堂医学』の比率は減少傾向にあるであろう。和文・英文雑誌の絶対数が増え、論文を掲載する雑誌に選択枝が増えていることが影響していよう。次に主な研究分野別の掲載論文数を表-1に示す。実際には複数の科・分野での共同研究であることも多いが、簡便化して、表では主に論文内容の主たる専門性から分類した。一番多いのが病理学系（人体病理、実験病理、免疫病理を含む）であり全50編（11.7%）を数える。以下循環器内科学（46編、10.8%）、一般外科・消化器外科学（43編、10.1%）、消化器内科学（32編、7.5%）、精神医学（28編、6.6

%）、腎臓内科学（26編、6.1%）、眼科学（24編、5.6%）となっている。表から推測できるが年代により分野の割合に変動がみられる。例えば80年代には病理、消化器、循環器の3分野のみで1/2弱を占めていた（46.3%）が2000年代には病理、消化器、循環器の占める割合が低下し（15%）、代わって眼科（14.9%）や腎臓内科（12.2%）の比率が多くなっている。また、掲載論文が多く分野に分散してきていることが表から見てとれる。

次に分野毎に具体的な原著テーマの変遷をみていきたい。膨大な論文数なので抜粋しながら主な分野毎に鳥瞰してみたい。

- 1) 病理学：臨床各科との研究の兼ね合いもあり多彩な分野の論文がみられたが、80年代に比べ、90年以降は比率が低下している。80年代は臨床病理学的研究と動物モデルでの実験病理学的論文が同程度みられた。臨床病理学では髄膜腫、胸腺病理、脾臓癌、脾炎、胆嚢癌、神経ベーチェット病、膠原病の病理などの論文が掲載された。80年代後半から2002年ころまでは、免疫学に関する論文、特に自己免疫疾患モデルマウスを用いての研究論文が多く掲載された。
- 2) 消化器内科学：1982年から1991年の間に胃・小腸・大腸の腫瘍および炎症性疾患に関するX線・内視鏡診断学・形態学的研究が多く掲載された。胃では胃癌ひろいあげ、残胃癌、線状潰瘍、硬癌、表層拡大型早期癌、大腸では絨毛腫瘍、早期大腸癌、潰瘍性大腸炎などに関する論文が掲載された。90年代からは掲載論文数が激減した。

*順天堂医学編集委員

順天堂大学医学部病理学第二講座講師

〔Aug.31, 2005 原稿受領〕

表-1 順天堂医学701号(1981年3月)~800号(2005年12月)に掲載された原著論文の内訳

[illegible]27-51卷
(701-800号)

- 3) 循環器内科学：80年から2001年まではほぼ毎年掲載論文があった。多い年では5論文（45巻，1999-2000年）を数える。心筋梗塞・虚血性心疾患・心筋症・不整脈・伝導異常などに関する診断学，病態生理，薬理に関する論文が多い。95-96年には剖検輯報を用いて心筋疾患や職業と急死に関する疫学的論文があった。新しい検査解析法として2000年にはspectral turbulence法が掲載された。その他マウスでの心筋虚血モデルを用いた研究やノックアウトマウスを用いての血管内皮障害研究（47巻）もみられた。
- 4) 腎臓内科学：96年頃より掲載論文数が多くなり今日に至る。腎病変における新規分子（各種サイトカイン，エンドセリン-1，FcR，カテプシン）に関する研究，動物モデル（ループス腎炎，2型糖尿病モデルマウス），遺伝子多型（Fc gamma受容体，C1q）などの研究が発表されている。2000年代には掲載の割合が12.2%と最多であり，活気が感じられる。
- 5) 一般外科学・消化器・腹部外科学：80年代後半から90年代前半に論文が多い。これまでに掲載された論文には外科治療の臨床病理学，細胞診，造影診断法，外科患者の病態生理や検査マーカーに関する研究，手術法や予後の臨床検討など多彩である。動物実験では，イヌでの実験的膵炎（39巻）や膵癌モデル（42巻），adriamycin動注実験（38巻）や，ラット・マウスを用いてのがん治療実験論文も散見された。
- 6) 精神医学：癲癇，境界例や精神分裂病の臨床脳波学，老年期痴呆，順天堂医院入院患者の精神科関与や総合病院での精神科の機能に関する研究，更年期不定愁訴の精神医学，がん告知の問題などを取り上げている。動物実験では1988-1992にかけて，ラットを用いた脳移植，神経病理や神経薬理学的研究論文が多く掲載された。
- 7) 眼科：89-90年および2001-2003年に二峰性のピークを示す。各種ヒト眼科疾患の臨床研究の他にも角膜移植ウサギを用いての実験（36巻，48巻），角膜疾患の遺伝子変異や遺伝子発現プロファイルなど（48巻）の論文もみられた。
- 8) 衛生・公衆衛生・疫学：44-45巻（1998-2001年）に掲載論文が11編集中している。在宅ホスピス，医薬分業，インフルエンザワクチンの抗原変異，未婚女性の結婚・出産，寝たきり予防，母親と食品添加物，小児の体格とライフスタイルなどの論文がこの時期に掲載された。
- 9) 上記以外の臨床分野：産婦人科では80年代から90年代前半に毎年1-3編掲載されたが，内分泌ホルモンや胎盤の病態生理，性分化などに関する論文が多かった。95年以降はほとんど掲載がない。整形外科では43巻（1997-98年）に論文が9編集中している（臨床研究4編，動物実験5編）が，それ以外の時期には少ない。放射線科では45巻（1999年）に乳癌の画像と病理所見の対比，MRIの直腸癌進行度診断に関する論文や50巻（2004年）にはマルチスライスヘリカルCTによる冠動脈造影の論文がある。画像診断能力の向上や新しい検査法への取り組みに意気込みが感じられる。
- 10) その他の分野：保健医学・看護・社会医学分野からは難病患者のQOL（48巻），ホスピス・緩和ケア病棟（49巻）に関しての論文が掲載された。体育スポーツ健康科学部からは長距離トレーニングの生理学（37巻），加齢および運動習慣と視機能との関係（51巻）等の論文が掲載された。病院管理などの分野では，順天堂医院の医療保険審査（34巻），医育機関の評価（37巻），剖検率の推移（44巻），救急応答（48巻）に関する論文掲載があった。

おわりに

『順天堂医学』原著論文25年間の変遷を概観してみた。今後も医学部各分野のみならず，スポーツ健康科学部，医療看護学部，その他多方面の分野から投稿されることを期待し，『順天堂医学』原著論文が毎号新鮮さを保っていく事を祈念しつつ稿を終える。